

第2章

多摩市の環境

多摩丘陵の北端部に位置する多摩市域は、長年にわたる大栗川やその支流の侵食によりできた丘陵地形を特色とします。

多摩ニュータウン開発前は、谷戸を伴う里山風景が見られましたが、その環境は多摩ニュータウン開発により大きく変わりました。

ここでは、多摩市域の環境の特色や、開発前と開発後の生き物や植物などについてそれぞれ紹介します。



多摩よこやまの道の雑木林 2016(平成28)年9月

谷戸の成り立ち

多摩市は、奥多摩などの山間地を除けば都内でも比較的起伏に富む地域です。ニュータウン建設による大規模な造成を経た今日でも市内には多くの坂があり、谷沿いの低い土地もあれば、眺めのよい丘もあります。ニュータウン以前の多摩市は典型的な里山でした。谷戸と呼ばれる緩やかな谷沿いには水田、斜面には薪炭林や畑が広がる風景が見られました。このような地形を丘陵といい、八王子から多摩、横浜、鎌倉にかけては多摩丘陵と呼ばれています。

多摩市周辺は50万年前頃には扇状地が広がる平坦な土地で、相模川が現在の相模原方面から流れ下っていました。その後、流路の変化や隆起により、武蔵野台地のような平坦な台地になりました。さらに時間が経過し、大栗川やその支流により侵食が進み、平坦な台地の地形は失われ、斜面を主とする丘陵が成立しました。谷戸を伴う里山の基となる地形の出現です。その成立までおよそ50万年の時間が費やされました。(鈴木毅彦)



造成前の谷戸の風景 1968(昭和43)年11月

写真中央部の左右に伸びる黄色の部分、は、乞田川沿いに広がる水田地帯。造成前の谷部と尾根部の地形がよくわかる。



造成後の風景(愛宕配水塔より) 2009(平成21)年2月

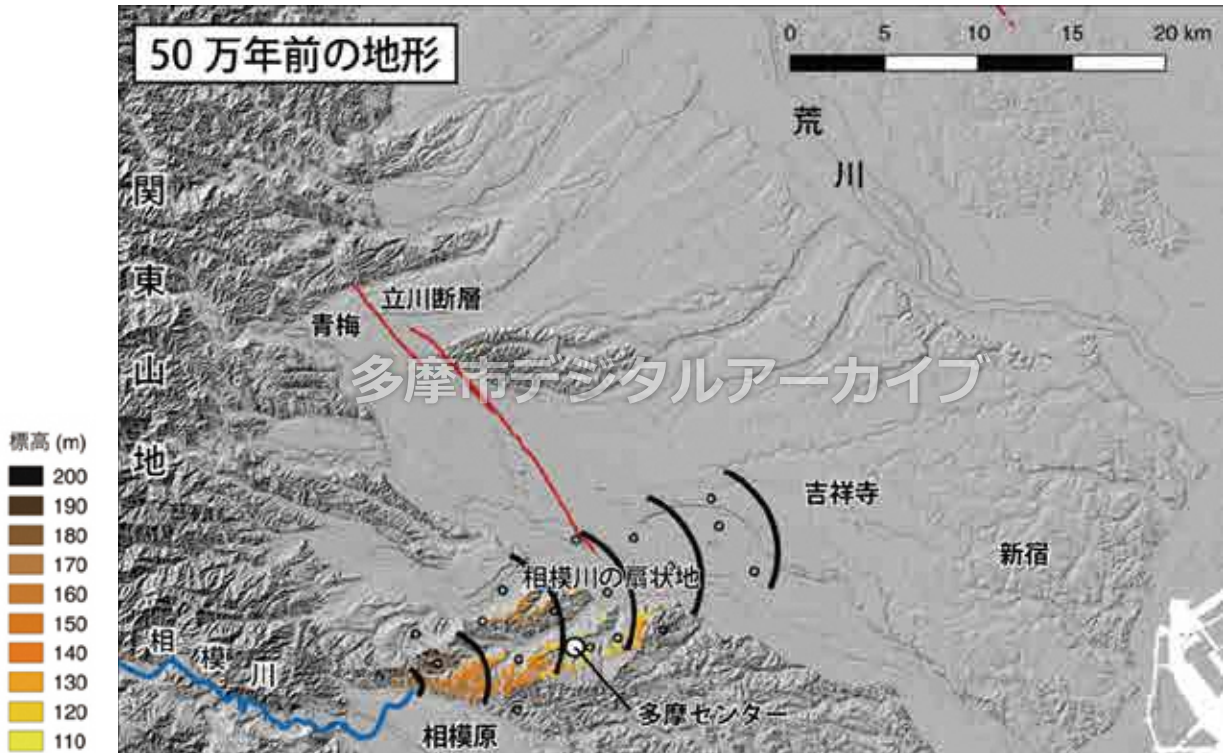
写真中央部付近に残された左右の緑地は、それぞれ貝取山緑地と豊ヶ丘北公園。手前には鉄道高架が伸びる。



空から見た1961(昭和36)年の多摩センター周辺

多摩ニュータウン造成前の現在の多摩センター周辺には典型的な里山風景が広がっていた。

写真中の場所は、①府中カントリークラブ、②唐木田駅、③東京国際ゴルフクラブ、④多摩センター駅。



50万年前頃の地形

多摩市が相模川の扇状地であった。

環境・植物

起伏に富んだ多摩の丘陵地はアカマツやコナラを主体とした雑木林が続き、平坦な場所では畑が広がっていただけでなく、牛馬の餌となる草や屋根材となるススキを採る草地も広範囲に存在していました。こうした場所には、秋の七草で知られるキキョウやオミナエシをはじめ、多様な草花が四季を彩ります。丘に幾重にも刻まれた谷筋では谷戸田が営まれ、周辺には池沼や湿地、よく刈り込まれた芝地などが広がり、樹林地や採草地では見られない水湿生植物や、コケリンドウ、オカオグルマといった、頻



多摩よこやまの道の雑木林 2016(平成28)年9月
農山村時代の多摩の里山の面影を今に伝えるコナラの雑木林。



左:オキナグサ(キンポウゲ科)

1966(昭和41)年4月
1950年前後に急速に衰退した野草で、「ピンタボ」の名で親しまれてきた。撮影地永山。



右:群生するノアザミ(キク科)

2017(平成29)年5月
草原性植物の多くが環境変化で失われたなか、今も見ることのできるアザミの一種。撮影地山王下。

繁な草刈りの合間をぬって生き抜くことのできる野草などが生育していました。また、多摩川に面した肥沃な沖積低地でも畑や田んぼが営まれていましたが、強い陽光にさらされる一方、しばしば氾濫による出水に見舞われる河川敷では、こうした環境に適応して生活することのできるミゾコウジュやカワラサイコ、ヤナギ類などの草木が河川植生を独特のものにしていました。(内野秀重)



ひっそりと生きるバアソブ(キキョウ科)

2019(令和元)年8月

湿った林縁に生えるつる性植物で、市街地に残された緑地に残存している。撮影地永山。



大輪の花ヤマユリ(ユリ科)

1989(平成元)年7月

鱗茎(りんけい)は食用となり、夏の里山を代表する花として昔から愛されてきた。撮影地和田。



タマノホシザクラ(バラ科)

2019(平成31)年3月

ニュータウン開発の荒波を生き抜いてきた多摩丘陵に固有の貴重な桜。撮影地山王下。



カワラサイコ(バラ科)

2009(平成21)年6月

礫質の河原に生える多年草で、低地の多摩川沿いにわずかながら現存する。撮影地関戸。

生き物

開発前の多摩市付近には、水田や畑が多くみられ、草地やクヌギやコナラなどの林がありました。シカやイノシシの姿はありませんでしたが、ホンドタヌキ、ホンドギツネ、ノウサギなどは普通にみられました。

雑木林のクヌギやコナラの木には樹液を吸いにカブトムシやコクワガタ、ノコギリクワガタなどが来ていました。シロスジカミキリなどの甲虫類も見られ、オオムラサキなどのチョウもいました。ところどころにはススキの草原があり、ノウサギなども暮らしていました。



ホンドギツネ 2020(令和2)年4月

キツネの姿を見ることは珍しくなかった。大きく緑が失われたいま、昔からの樹木が残されているわずかな場所にひっそりと暮らしている。撮影地八王子市鎌水。



ノウサギ 2008(平成20)年7月

野山で草むらをかける姿がみられた。冬には畑の小麦などをこっそり食べていた。撮影地八王子市別所。



ニホンイタチ 2015(平成27)年10月

川沿いには、魚を食べたりする姿が見られた。撮影地連光寺。

畑や水田、林の近くの草むらにはカヤネズミの巣があり、アズマモグラなどのモグラの仲間も生活していました。

草むらには、キリギリスやスズムシ、クツムシなどが季節ごとに虫の鳴き声を届けてくれました。

谷戸の水田にはドジョウやメダカが泳ぎ、湧水にはサワガニの姿があり、カワニナも棲んでいてホタルの姿もありました。

乞田川や大栗川には、今では珍しくなったカマツカや大きなギバチが泳ぎ、スナヤツメもいました。堰の付近にはドブガイなどが生活し、ヤリタナゴなども泳いでいました。

開発前には、実に多種多様な生き物たちが環境に合わせて生活していたのです。(大澤進)

ホトケドジョウ(連光寺産)

2006(平成18)年4月

谷戸のきれいな湧き水の流れる場所で泳ぐ小さな群れが見られた。



サワガニ 2004(平成16)年9月

かつての水田や沢治いの湿地や谷には、ふつうに姿が見られた。撮影地八王子市別所。



ギバチ 2019(令和元)年8月

今ではほとんどその姿が見られず、小さい個体ばかりであるが、かつては大雨などの時に写真のような大型の個体がよく釣れた。撮影地千葉県君津市。



環境・植物

多摩ニュータウン開発の拠点であった多摩市の丘陵地風景は都市的景観に大きく変貌し、燃料革命をきっかけとした里山の社会的環境変化と相まって、多くの野草たちが消えていきました。しかし、関戸や和田、連光寺地区などには原風景的な植生が保全され、コナラやクヌギの雑木林には、多摩丘陵固有のタマノカンアオイをはじめ、フデリンドウやキンランなどといった里山の植物が今も健在です。また、市内には新たに整備された公園、原地形を活かした緑道や緑地が数多くあり、コバンソウやユウゲ



一本杉公園のスタジイ(ブナ科) 2016(平成28)年7月
人々に守られてきたスタジイは、地域の歴史を見続けてきた大木。撮影地南野。



左:タマノカンアオイ(ウマノスズクサ科)

2017(平成29)年4月
多摩丘陵を代表する貴重な固有種で、原地形の残る公園や緑地に残存する。撮影地永山。

右:フデリンドウ(リンドウ科)

2014(平成26)年4月
春を彩る小さな越年草で、里山的な公園の路傍や疎林下などに点在する。撮影地唐木田。

シヨウなど、多様な帰化植物が入り込んでいるなかにも、カントウタンポポやノアザミ、ホタルブクロといった郷土の野草が残存している場所も少なくありません。なお、河川低地の大部分も土地利用の形態が大きく変わりましたが、多摩川と大栗川合流点付近では河川敷から段丘崖の自然が広く残され、外来植物が広範囲に生育する環境下、河川特有の植物が今に命をつないでいます。(内野秀重)



ギンラン(ラン科) 2017(平成29)年5月
腐食層が安定した樹林下で菌類と共生し、街の公園や緑地でも見られる。撮影地永山。



ユウゲシヨウ(アカバナ科) 2016(平成28)年6月
熱帯アメリカ原産で園芸種から野生化し、今や街の隅々で目にする春から夏の定番野草。撮影地南野。



ニシキソウ(トウダイグサ科) 2017(平成29)年9月
古い街並みの空地・路傍に生える一年草で、多摩市では低地を中心に分布。撮影地一ノ宮。



セイトカアワダチソウ(キク科)
2019(令和元)年11月
かつては造成地に繁茂していた外来種だが、水辺や農地周辺に定着している。撮影地一ノ宮。

生き物

かつての里山、丘陵地だった多摩ニュータウンには居住区と隣接する公園、緑地にかつての雑木林が一部残っていることもあって、身近に多種の動物たちが暮らしています。哺乳類ではホンダタヌキ、アズマモグラ、アブラコウモリなど、両生・爬虫類ではカナヘビ、アズマヒキガエルなど、鳥類ではシ



ホンダタヌキ 2018(平成30)年10月
映画「平成狸合戦ぽんぽこ」の主人公。雑食性。たまに住宅地にも。撮影地関戸。



キジバト(別名ヤマバト) 2020(令和2)年2月
多摩市の鳥。公園、緑地の樹木周りで一年中見られる野生のハト。撮影地山王下。

ジュウカラ、モズ、ヒヨドリ、ハシボソガラス、オナガなどが、水路や公園の池にはカルガモ、コサギ、アオサギなどがみられます。昆虫類では、ジャコウアゲハ、ツマキチョウ、オオシオカラトンボ、マユタテアカネ、コクワガタ、ショウリョウバッタ、ハラビロカマキリなどが固有の環境を利用しています。しかし、最近では外来種、たとえばハクビシン、ガビチョウ、オオクチバス（ブラックバス）、アカボシゴマダラなどが増えて、対策が必要な環境問題となっています。（松井安俊）



ゴマダラチョウ 2009(平成21)年9月
公園や神社のエノキで育ち、年3回発生。外来種に追われて減少中。
撮影地南野。



シンジュサン 2017(平成29)年7月羽化
公園のニワウルシ(シンジュ)で発生した大型美しい野蚕(やさん)の一種。採集地中沢。



オナガサナエ 2007(平成19)年8月
小川などで発生して、公園、緑地の道筋などにもやってくる珍客。
撮影地中沢。



ヤマトタムムシ 2013(平成25)年7月採集
鞘翅(しょうし)が綺麗に輝く、皆が知る甲虫。「タンスの虫除け」の俗信も。採集地中沢。

《トピックス》 連光寺・若葉台里山保全地域

稲城市との境の谷戸の湿地で開発計画が動き出したのは2007（平成19）年。当時、希少な動植物を育む湿地の価値はほとんど知られていませんでした。「ここを残したい」との市民の願いが共感を広げ、動植物の専門家の調査、3,000筆超の署名やカンパ、開発・設計業者や行政との何度もの話し合いへとつながりました。保全を求める市民の粘り強い活動が功を奏し、2014（平成26）年11月14日に東京都の保全地域に指定されました。湿地は保全され、今も市民による保全のためのボランティア活動が続いています。（連光寺東谷戸の会）



多摩市内ではここでしか見られない
自然発生 of ヘイケボタル
2019(令和元)年7月



国の絶滅危惧種「キバサナギガイ」
2019(令和元)年8月



湿地内の田んぼに産卵に訪れるシュレーゲルアオガエル
2011(平成23)年6月



春の湿地風景 2010(平成22)年4月



下流から見た水路 2009(平成21)年5月
水路にはホトケドジョウやカワニナなどがある。